

# 企業と企業の架け橋となって、日本の産業をもっと元気に。

藤本梨沙  
RISA FUJIMOTO

赴任地

 エルサルバドル

赴任地での職種(活動分野)  
環境教育

京都府相楽郡  
ゼネラルプロダクション  
株式会社

学生時代から環境問題に興味を持ち、卒業後すぐに青年海外協力隊に応募。エルサルバドルではゴミのポイ捨て防止などの環境教育に携わる。帰国後、ゼネラルプロダクション株式会社の立ち上げに参加し、現在も同社のマーケティングマネージャーとして活躍中。

## 中小企業の活性化のために、わたしができること。

日本の製造業は中小企業の高い技術力によって支えられてきた。しかし、各企業それぞれが孤立していることで、一貫したものづくりができないことが大きな課題だ。「青年海外協力隊の赴任先だったエルサルバドルから、生まれ育った東大阪市に戻ると、なんとなく活気がなくなったように感じました」。藤本梨沙さんは、多くの工場が廃業し、寂しくなってしまった街を元気づけるために何ができるのかを考えた。そして、ある考えがひらめく。

「街を元気にするには経済の活性化しかない!」

思いついたら、もう止まらなかった。企業経営者が集まる中小企業振興のためのセミナーに積極的に参加。自分の力を活かせる場所を探し求めていたとき、出会ったのが石崎義公社長だった。

「中小企業をつなぐネットワークをつくることで、ものづくりの全工程を構成する。そんな具体的なビジネスモデルを示されていたのが、石崎社長でした。自分のやりたいことはこれだと確信しました」。

藤本さんは石崎社長に自分の思いのすべてをぶつけた。

そして2010年、ゼネラルプロダクション株式会社が誕生する。

ゼロからのスタート。  
でもやってみるしかない。



藤本さんにはそれまでに社会人経験がなく、漕ぎ出した会社もまったく新しいビジネスモデルを目指す企業。不安はなかったのだろうか?

「エルサルバドルでの目標は『ゴミのポイ捨て防止』の啓発から、街の衛生全体に対する環境教育を行うことでした。でも現地に着いてまず驚いたのは、街にゴミ箱そのものが存在しなかったことです(笑)。最初に取り掛かったのが、ゴミ箱を設置していくことです。現地でもまさにゼロからのスタートだった。

「とにかく、やってみるしかない。そこに何もなければ、自分で作っていくしかない。そんな状況に身を置いたことで、常に前向きに行動し、試行錯誤を繰り返しながら物事に挑む姿勢を身につけることができました」。



自社システムで開発したLED植物栽培装置の前で。



## 今度は、高齢化が進む農業の現場のために。

現在は主に、自社のビジネスシステムで製作したLED植物栽培装置の営業とマーケティングに携わり、栽培指導のためにはどんな所にも出向くという。

「高齢化社会のなか、まだまだ農業に携わりたいと願う高齢の農家の方々に希望を持ってもらえたらと思っています」。人のために前例のない分野へ飛び込み、進み続ける。それが藤本さんのやり方だ。



前向きなパワーと積極性、そしてこの笑顔で課題に挑み続ける。

上司に聞く!



ゼネラルプロダクション株式会社 代表取締役 石崎 義公さん

中小企業振興に対する彼女の熱意に触れたことが、当社を立ち上げるきっかけとなりました。非常に粘り強く、バイタリティに溢れる藤本さん。企業の代表者や官公庁の人々に対して、少しも怯まずに交渉できるアグレッシブな姿勢は、やはり協力隊の経験から培われたものなのだと思います。

## 考えを押し付けるのではなく、まず自分が相手を理解すること。

藤本さんが環境教育のために訪れたエルサルバドルには、「ゴミのポイ捨てはいけないこと」という考えそのものがなく、初めは途方に暮れてしまったこともあったという。時には現地スタッフに声を荒げてしまうことも。しかし、「リサはどうしていつもそんなに怒っているの?」と言われたことから、自分の考えを押し付けようとしていたこれまでの自分を反省。

ドラム缶にペイントを施したゴミ箱を公園に設置したり、講演やワークショップを開催したり、地元のラジオやテレビに出演して啓発活動を行うなど積極的な活動を進めていくうちに、現地の人々が暮らしている生活環境や、人々の考え方を理解で

きるようになっていた。

「人々の考えを理解するためにこれまで以上に積極的に人々と接するようになってから、楽しみながら活動に取り組めるようになりました」と藤本さんは語る。



これがエルサルバドルの街のゴミ事情。



ゴミのポイ捨て防止キャンペーンのためにオリジナルソングも作成。

## 青年海外協力隊を目指すみなさんへ 現地の価値観に触れることで見えてくることがあります。

協力隊の活動は決して最初から思い通りにいくものではなく、誰もが最初はひどく落ち込まれます。でも、現地の価値観に触れることで、真剣に悩んでいた物事がそれほどたいしたことじゃないと思えるようになるかも知れない。現地の人々と思いを一つにすることで、はじめて自分の能力を存分に発揮できると思います。

# 創業160年の歴史を持つ 京都の老舗料亭の活性化に成功。

**野口拓勇**  
TAKUYU NOGUCHI

赴任地  
**タンザニア**

赴任地での職種(活動分野)  
**土木施工**

京都市左京区  
**下鴨茶寮 取締役**

商社在職時に取得した一級施工管理士資格を活かし土木施工管理者としてタンザニアに赴任。帰国後、さまざまなホテルやレストランの再生事業に携わった手腕を株式会社オレンジ・アンド・パートナーズに認められ、現在は同社取締役として下鴨茶寮の活性化に勤む。

## 伝統と格式の街、京都にひとり乗り込んで。

京都市左京区。下鴨神社にほど近い閑静な住宅地に、160年の歴史を誇る料亭「下鴨茶寮」はある。株式会社オレンジ・アンド・パートナーズの代表、小山薫堂氏の発案を受け、同社取締役の野口拓勇さんがこの下鴨茶寮の活性化に乗り出したのは2012年のことだ。「確かにこれまで、会社の事業として数々のホテルやレストランの再生・活性化事業に取り組んできました。しかし今度任されたのは、伝統と格式を重んじる京都の老舗料亭。さらにわたしは東京からやってきたまったくのよそ者。さすがにプレッシャーを感じましたよ」。

しかし野口さんならできると経営陣は判断した。「君はアフリカにいた人材だ。どんな環境でも成果をだせるはずだ」。そんな熱い激励を受け、野口さんは京都の街へ向かった。「思っていたとおり…というか思っていた以上に、代々この料亭を支えてきた女将をはじめ、従業員のみなさんに受け入れられるまでは大変でした(笑)」。しかし、野口さんはこの料亭に飛び込み、独自の手腕で活性化を果たす。小山代表の目は、正しかった。

## 自分が求められる環境を自ら作り出すということ。

青年海外協力隊で訪れたタンザニアでは、土木施工隊員として道路、水路、橋梁などの施工管理に携わった。しかし着任当時は予算の不足や現地行政の不手際などが重なり、ほとんど仕事に取り掛かれない状況が続いたという。「『ひょっとして、自分は必要とされていないのでは?』と悩んだこともありました」。しかし、そこでめげる野口さんではなかった。「ふと気づいたんです。充実した環境を求めただけではなく、自分が環境に何かを与えるを考えなければ」と。

そこで野口さんはHIVに感染した現地の女性たちが、仕事をもらえないでいる状況に着目し、日本から寄付を募り、彼女たちの仕事先となる養鶏所の設置に尽力した。結果、彼女たちに仕事と生きがいをもたらすことができた。



いつも従業員のみなさんに気軽に話しかける野口さん。



下鴨茶寮は2016年、東京・銀座にも出店される。

## 「変える」よりも「変わる」のを待つ。

「目標を達成するためには、人々の共感を集めることが大切です」と語る野口さん。下鴨茶寮の活性化事業では「どこまでも、従来までのやり方と伝統を重んじる」という方針でゆったりと従業員たちの心を掴みながら溶け込んでいった。一人のリストラも、降格も出さない。それが野口さんの定めた活性化のルールだ。「無理に変えず、自然と変わっていくように導いていく…これも“活性化”です」。

同僚に聞く!



下鴨茶寮 料亭部 料理長 **明石 尚宏**さん

いつもわたしたち従業員の目線に立ち、真剣に意見を聞き、議論してくれる野口さんの姿勢のおかげで、料亭全体の風通しがとてもよくなったと思います。時に意見を戦わせることもありますが(笑)、下鴨茶寮をさらに発展させるため、お互いに力を合わせて取り組んでいきたいと思っています。

## 「必要とされる人間になる」そのために努力することの大切さを知った。

「海外で働いた経験がある、と言ってもアフリカで働いた経験を持つ人間なんて、そういないでしょう?」。野口さんがタンザニアを赴任先として希望したのは、「自分の価値にプラスアルファをつけたい」という強い思いだった。しかし、現地では肝心のインフラ整備作業が遅々として進まず、無為の日々が続いた。

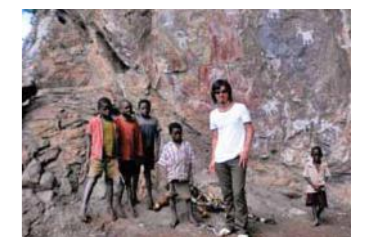
「苛立ちが募って現地スタッフと衝突したこともありました。でも、本当に人から必要とされるためには、自分から必要とされる人間になろうとする努力が大切だと気付いたんです」。

衝突したスタッフは野口さんが帰国するとき、寂しくないと泣いてくれた。

「2年間の赴任期間は、今のわたしの大切な財産です。だから今も必要とされている自分に自信を持つことができているのだと思います」。



タンザニアのビールはおいしく、野口さんのお気に入りとなった。



地元の子供たちと一緒に記念撮影。

## 青年海外協力隊を目指すみなさんへ 決して気負うことなく、「人生の有給休暇として」活動を楽しむ。

協力隊員として過ごす2年間は、いわば人生の「有給休暇」。決して気負う必要はありません。この期間を有効に活かすために、精一杯奮闘してください。わたしはタンザニアで、どんな過酷な環境にも挑戦することの素地を得ることができました。現地で得た経験は、きっとあなたの人生を豊かにしてくれます。

# 行政の力で、京都市の 障害施策の充実に挑む。

**瀬川 裕**  
HIROSHI SEGAWA

赴任地

 **エチオピア**

赴任地での職種(活動分野)  
**PCインストラクター**

京都市中京区  
**京都市 保健福祉局  
障害保健福祉推進室**

システムエンジニアとして商社に勤務後、  
青年海外協力隊に参加。エチオピアの首都  
アディスアベバの学校で情報教育教師として  
活動する。帰国後、京都市の協力隊経験者枠を  
利用して京都市役所に採用され、  
障害者施設の整備に携わっている。

## 民間の力だけでは解決できない問題がある。

瀬川裕さんは青年海外協力隊としてエチオピアで活動した後、京都市役所の障害保健福祉推進室に所属し、3年目を迎えた。

「障害者施設の整備や耐震化・防火対策等について、事業者や国、市の各部署との調整を行うことが主な仕事です」。

瀬川さんが行政の仕事に携わろうと思った理由には、青年海外協力隊の活動を通して受けた印象が強く影響している。

「現地では高校生を対象にパソコンの操作を教えていたのですが、彼らがその技術を活かすための就職先がきわめて少ないことを実

感しました。こうした問題を解決するためには、やはり民間の力だけではなく行政の力が必要だ、と考えたことが大きかったですね」。

社会の課題に挑むために、民間企業の力に頼るだけでは限界がある。その問題意識が、行政職に瀬川さんを引き寄せた。

「上司や同僚、他部署の方々、できるだけ多くの人の意見を取り入れて仕事を進めていくことを心がけています。これはエチオピアでの活動で、1人で抱え込まずに現地の職員を巻き込みながら、仕事に取り組んできた経験から掴んだやり方です」。

## まず、パソコン操作の 楽しさを知ってもらうこと。

エチオピアでは16~18歳、高校生クラスの生徒たちを受け持った。「ほとんどがパソコンの電源の付け方も知らない生徒たちばかり。最初は興味を示してくれない生徒もいましたが、わたしが日本でSEとして働いていたときの月収を現地の金額に換算して黒板に書きだすと、生徒たちの目が輝きました(笑)」。

やる気を引き出された生徒たちは徐々にパソコンの操作に慣れていった。放課後も学びたい生徒たちのために、パソコンラボを開放。熱心な生徒たちは時間を忘れて練習に励んでいたという。学年が変わる時期に、瀬川さんの担当していたクラスを他の教員が受け持つことになり、生徒からは「新しい先生には悪いけど、今の授業はつまらない。セガワ先生の授業のほうが楽しかった」と言われた。



他部署との連携を図りながら業務に動かし瀬川さん。



京都市役所には青年海外協力隊OB・OGが多数勤務している。

## 長期的視点をもって、 結果を出すことの大切さ。

「授業からパソコンに興味を持った生徒たちがわたしの帰国後も学び続け、最終的にその技術を職業に活かすことができたらいい、と考えていました」。この発想は、現職にも通じている。「行政の仕事は1日で結果が出るものではなく、長い期間をかけてようやく成果が現れます。昨年、ある障害者施設の設置に携わったのですが、新聞で利用者さんの感謝の声を読み、心からやりがいを感しました」。

上司に  
聞く!



京都市 保健福祉局  
障害保健福祉推進室 施設福祉課長 **近藤 恵さん**

瀬川さんは実に行動力がある人材。障害保健福祉はとても課題の多い仕事ですが、彼は業務をこなしながら、外国人観光客誘致のワーキングチームや庁内の英語講座に参加するなど積極的に活動しています。今後さまざまな経験を積み、幅広い視野を培ってほしいと思います。

## 授業に工夫を重ねながら、 現地の同僚との信頼関係を築く。

エチオピアでの授業では、生徒たちの興味を引き出すために試行錯誤を繰り返したという瀬川さん。「グループワークを取り入れたり、ハードの説明に動画を活用したりと、工夫を重ねて進めていきました」。

機材は揃っているのに、現地職員たちがウイルス対策に対してほとんど注意を払っていなかったことに驚かされた。また、ハードの修理に関して手を焼いたことも。

「修理担当者が『修理は自分の仕事!』とこだわり、なかなかわたしに関わらせてくれないんです(笑)」。

しかし、任務に対する自分の焦りが、その職員との間に軋轢を生んでいたことに

瀬川さんは気づいた。「仕事の話をする前に同僚と十分コミュニケーションをとり、信頼関係を築くことの大切さを知りました」。



白衣を着た現地の同僚たちとともに。女性も多く働く現場だった。



“セガワ先生”の授業を熱心に聞く生徒たち。

## 青年海外協力隊を目指すみなさんへ 日本以外に、心から応援したい 国がきっとひとつ増えます。

2年間の活動で、幅広い視野や価値観の違いを学ぶことができました。また赴任先の暮らしの素晴らしさを感じながら、世界のなかの日本のよさも感じることができましたね。興味があればぜひ挑戦してください。2020年の東京オリンピックで、心から応援できる国が日本以外にきっとひとつ増えますよ。

# 途上国の人々と心ひとつに 今も道をつくり続ける。

酒井 樹里  
JURI SAKAI

赴任地

 **ウガンダ**

赴任地での職種(活動分野)  
**村落開発普及員**

京都市下京区 みちがしんびと  
**NPO法人 道普請人**  
事業管理責任者(アジア・アフリカ地域)

5年間勤務した雑貨メーカーを退職後、JICA関西の展示に足を運んだ際に協力隊OGの話に感銘を受け、応募を決意。ウガンダへ村落開発普及員として赴任中、現職のNPO法人理事長に出会い、その場でスカウトを受ける。現在も途上国の開発援助に尽力している。

## 専門知識よりも、情熱とコミュニケーションの力。

日本では道路が平らなのはあたりまえの話。しかし途上国ではそうはいかない。でこぼこの道、大きく穴が開いた道、ぬかるみの道…こうした悪路が途上国の人々の生活や産業の発展を阻んでいる。

「青年海外協力隊ではウガンダのジロブウェという地域で、ネリカ米というお米の普及活動にあたっていました。収穫したお米を脱穀機のある施設まで運ぶための道の状態がとてもひどかったことから、土木施工管理者として現地に赴任していた協力隊員と協力して、土のうを敷き詰めることで道を直していったんです」。

その噂を聞きつけて現地にやってきたのが、NPO法人 道普請人理事長で、京都大学大学院でも教鞭を執る木村亮氏だった。

「活動にあたって自分には何の専門知識もない…ということが不安だったのですが、知識がないならいい、わからないことは専門家に話を聞けばいい。そう思って前向きに取り組んでいました」。

土のうの並べ方について木村理事長から直接指導を受けた酒井さん。その熱心な姿勢が理事長の心を動かし、作業1日目で「帰国したらうちの法人の正職員として働かないか」と声を掛けられた。

## 自分たちの道は、 自分たちで直す。



帰国後すぐ、同法人の事業管理責任者として採用され5年。現在も酒井さんは、年の三分二をアフリカなどの途上国で過ごし、さまざまな国の道を土のうで直す事業計画のマネジメントに携わっている。「土のうを使った道直しはとても簡単で、現地の人々がすぐ覚えられることが利点。あとは、人々が自分たちの生活や産業の発展のために、自分たちが道を直しているという意識を持って働いていけるよう、サポートを行っていくことがわたしたちの役目です」と語る酒井さん。

決して、一方的に工法を教えるだけではない。現地の人とともに働くことで、自分たちも励まされる。何よりも、人々が自分たちのために道を作っていく過程を間近で見ることができるのが、このNPO法人の活動における醍醐味だという。



海外での活動に加え、オフィスでもエネルギーに活躍する。

## 世界のどこにあっても、 自分と他人の間に線を引かない。

「自分と他人の間に“線”を引かないこと」。これは、酒井さんが青年海外協力隊で身につけたポリシーだという。「違う文化圏で暮らしていても、結局は人間同士。自分がしてほしいことを相手にすれば、人は喜んでくれます。また自分がイヤなことは相手にもしない。あたりまえのことなんですけどね」。酒井さんは今、ミャンマーでの事業に携わっている。この“あたりまえ”は世界のどこにいても、変わらない。

上司に  
聞く!



NPO法人 道普請人 理事長 **木村 亮**さん

ウガンダで酒井さんに会ったとき、その熱意とコミュニケーション能力に驚かされました。今も人々のやる気を引き出して確実に成果を上げてくれる酒井さんは、当法人に欠かせない存在。彼女に続くよう協力隊OB・OGたちが、我々の活動に挑戦してくれることを願っています。



この取材が終わったら、ミャンマーへと旅立つという。

## 自分でやるべきことを決める。 だからやりたいことに挑戦できた。

現地では仕事の進め方に対する具体的な指示はなかった。「むしろ好都合でした。挑戦したいことを自由にやれたので…」。独自の視点で課題を発見し、次々と解決策を打ち出していった。「現地ではネリカ米を含め、米の栽培が下火になっていました。鳥害や雑草の問題のほかに、根本的な問題があることがわかったんです」。米には水田で栽培する種と畑で栽培する種があり、種が混合されて使われていたのだ。「また、脱穀を人力でしていたので、お米の粒が潰れてしまうという問題も…」。これには、眠っていた脱穀機を稼働させて対応した。

酒井さんが普及促進していたネリカ米

は年に2回収穫ができる。滞在期間中に、その成果を見ることもできた。「ネリカ米で得たお金で養豚をはじめた現地のおばあさんが、嬉しそうに子豚を見せてくれました」。



大豊作! 色づいたネリカ米の中で地元の農家家族と記念撮影。



土のうを使って道を整備。ノウハウは現職の木村理事長から直伝されたもの。

## 青年海外協力隊を目指すみなさんへ 現地の人々の暮らしと密着し、 お互いを思いやる気持ちを。

協力隊の活動の良さは、現地の人々と同じ場所に住み、生活をともにできること。そうすることで人々に対して親身にもなれ、相手を思いやる心も育まれます。また、現地の人が自分を思いやってくれたら、お返しをしたくなる。その気持ちが活動への大きな原動力になります。そんなふうに世界のどこにでも、誰かの役に立てるチャンスが転がっているのです。